

宮下拓三著

漢文のある風景

中国古典誕生の地を訪ねて

黎明書房

宮下拓三著

漢文のある風景

中国古典誕生の地を訪ねて

黎明書房

著者紹介

宮 下 拓 三 (みやした・たくぞう)

1956年静岡県浜松市に生まれる。

1979年静岡大学人文学部卒業。

1985年～1987年静岡県教育委員会から中華人民共和国
杭州大学文教専家（日本語教師）として浙江省杭州市
に派遣される。

現在、静岡県立静岡高等学校教諭。

漢文のある風景——中国古典誕生の地を訪ねて——

1989年5月1日 初版発行

著 者	宮 下 拓 三
発 行 者	高 田 利 彦
印 刷	株式会社チューエツ
製 本	株式会社渋谷文泉閣

発 行 所 株式会社	れい めい しょ ぼう 黎 明 書 房
------------	------------------------

460 名古屋市中区丸の内3-4-10 大津橋ビル ☎052-962-3045

FAX052-951-9065 振替・名古屋 8-59001

162 東京営業所・新宿区山吹町354 ☎03-268-3470

落丁本・乱丁本はお取替します。 ISBN 4-654-07520-8

© T.Miyashita 1989, Printed in Japan

日本音楽著作権協会(出)許諾第8863032-801号承認済

はじめに

虎はなんと鳴くかと聞かれ儒者こまり

これは江戸の川柳です。虎は「虎の威を借る狐」をはじめ漢文によく登場するおなじみの獣です。『礼記』にも孔子の言葉として、

苛政は虎よりも猛なり（『礼記』檀弓下）

とありますから、わが国の江戸時代の儒者も悪政を戒め善政を求めるために虎を引き合いに出して、弟子たちに得々として道を説いたに違いありません。しかし、悲しいかな、動物園のなかった当時、儒者には本物の虎を見るすべがありませんでした。弟子たちに虎の鳴き声を尋ねられても、儒教の經典には鳴き声の解説はしてくれてありませんから、ただもう困りはてて冷や汗を夕

ラリタラリとかくばかり。いつもは物知り顔で威張っている儒者から、一本とった庶民の笑い声が聞こえてきそうな川柳です。

ところで、私はこの川柳を読んだ時、この困りはてた儒者は実は他ならぬこの私だ、という思いにとらわれました。学生として漢文を学んでいた時に「これはいつたいたいということなんだろう」というたくさんの疑問を抱いたことはもちろん、高校の国語教師として漢文を教えながらも「これは一度行つて見てみないことにはわかりそうもない」ということが次から次へと出てくるのです。もし、それらの点について質問されれば、やはり私も「儒者こまり」となるしかなかつたわけです。

最近の中国ブームにのつて、現在たくさんさんの中国紹介図書や中国旅行案内書、中国写真集などが出されています。しかし、こと中国文学、その中でも特に漢文学といわれる分野に関しては伝統的に文字だけで、文字だけを問題にできているものがほとんどです。文学なのだから、文字だけで十分だ、と言う人もいえるかもしれませんが。しかし、中国史伝の大傑作『史記』も、それが傑作となり得た裏には、司馬遷が若い時代に中国各地を自らの足で歩き、自らの目で見、確かめた結果、中国の地理にたいへん明るかったという事実があつたのです。文学理解において、その文学が誕生した地を歩くということは、第一義ではないにせよ、より真実に近づくために大きな意義があることだと思えます。

漢文の大好きな私は、こんなふうに漢文の世界をよりよく理解するために、漢文誕生の地を自

分の足で歩き、自分の目や耳や肌でとらえたいと早いころから思っていました。そんな私に、二年間の中国派遣という話がころがり込んできました。「渡りに舟」とはまさにこのことです。場所は江南の地、浙江省杭州市。杭州大学ハンチョウの日本語教師がその仕事です。二年間の杭州滞在で、私は中国人と歩みを同じくしながら、四季を通じての中国生活を実体験することができました。もちろん、古人の足跡を求めて劣悪な交通事情にもめげず、中国各地にも出掛けました。寧夏回族自治区と貴州省を除く、すべての省・自治区・直轄市に入り、訪れた都市の数は六十余を数えました。

本書では、中国で実際に見、触れた様々な人や風景の中から、知っていれば漢文がよりよく分るようになるもの、漢文がおもしろくなるものについて書きました。それは実は、私が高校時代や大学時代に、そして教師になってからも次から次へと浮かんできた漢文に関する素朴な疑問に、一つ一つ答えを与えることでもありました。

銅鐸を復元してたいてその音を聞いてみたり、修羅しゅらを復元して物をひっぱったりする実験考古学というものがあります。その言い方にならえば、本書は「実験漢文学」とでも言えましょう。なかには復元しそこないのものもあるかもしれませんが。どうか多くの方々の御教示をいただきたいと思っています。同時に再び中国の大地を踏みしめて、より鮮やかな復元に挑戦したいものだと思っています。

目次

中国鳥瞰

南船北馬

14

冀土の牆

24

山陽山陰・川陽川陰

33

城——中国の都市——

41

黄土の世界

項羽を追う

54

窑洞の世界

67

江南の風景

西湖

78

湖心亭に雪を看る

86

黒雲墨を翻して

91

浙江の潮

96

更に上る一層の楼

103

周辺の土地

君見ずや青海のほとり 110

西域 — 陽関を出づれば — 120

杜甫の空想 127

湖南の光 134

江浙稔れば 139

都市探訪

孔子のふるさと・曲阜
146

殷墟を過ぐ
152

春秋戦国斉の都・臨淄
158

烟花三月・揚州
166

歴史地図
178

魔都・上海
182

慣習と文物

題 ず 192

対句の伝統 203

纏 足 209

古代貨幣の変遷 215

井に落ちて水底に眠る 220

庶民の生死に

鶏犬相聞こゆ

228

生食と寒食

234

人を食う

240

『故郷』

—— 閨土のこと ——

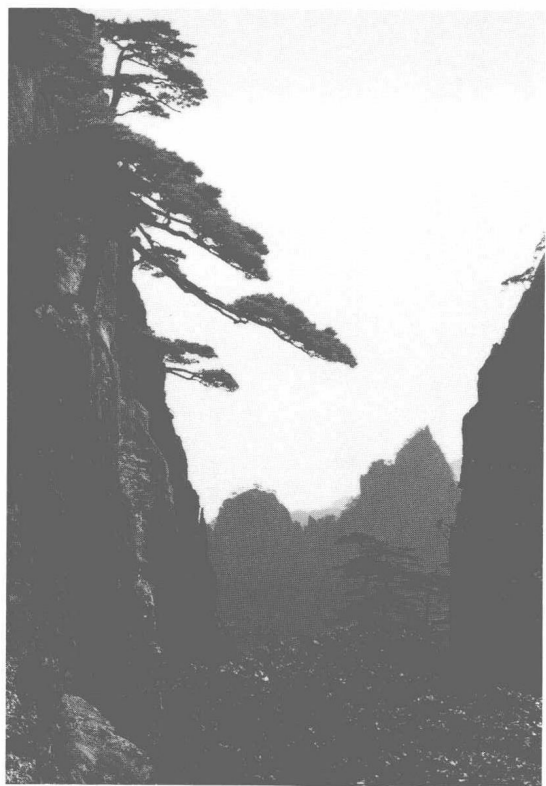
247

あとがきにかえて

—— 民衆の話 ——

253

中国鳥瞰



黄山(安徽省)

南船北馬

孔子はよく、日常生活の中から例を引き、それをたとえとして話をしていますが、今からお話するのもそんな一例です。

廐うまや焚やけたり。朝あさより退ひききて曰いわく、「人を傷そこえる乎や」と。馬を問とわず。（『論語』郷党篇）

「朝」というのは朝廷のことです。孔子が魯国ろこくの朝廷に出仕している間に、孔子の家の廐うまやが不幸なことに焼けてしまったのです。朝廷から帰ってきた孔子はこれを見て、「けが人はなかったか」と言っただけで、馬については一言も尋ねなかったというのです。孔子のヒューマニズムを読みとることができる段章です。ところでこの話、孔子が魯国の曲阜きょくふ生まれであつたことにおおいに関係しての話と言えそうです。というのは、曲阜など中国北方の町では日常生活の中に馬が登場しますが、これが同じ中国でも南の地方になるとだいぶ事情が変ってくるからです。